

☆四旬節第5主日(3月26日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (エゼキエルの預言 37章 12-14節)

主なる神は言われる。「わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住ませる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる。」

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会へ手紙 8章 8-11節)

愛する皆さん、肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

福音朗読 (ヨハネ 11章 3-7、17、20-27、32-45節)

そのとき、ラザロの姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに

行こう。」

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

イエスは心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。マリアのところに来て、イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

桜の花がちょっと心配な今日この頃です。いわゆる菜種梅雨で、東京は一気に冷え込みましたね。世界野球 WBC では昔野球少年だった私はちょっと痺れました。また 21 日には東京カテドラルで新司祭六名の叙階式があり、こちらも自分の司祭叙階式を思い出して感動的でした。三月というのは何かと感動することが多い月なのですね。

さて、教会の典礼は早くも四旬節の後半に入り、イエスの受難に向けてのイエスの最後の旅が始まります。復活祭に洗礼を受けられる洗礼志願者のための祈りにも力が入る時期でもあります。足立教会では今年は洗礼志願者はおられませんが、各教会の洗礼志願者のためにも祈りを捧げましょう。

第一朗読 (エゼキエルの預言 37 章 12-14 節)

イスラエルの民を墓から引き上げ、約束の地に連れていくという預言はバビロン捕囚時代のものですが、イスラエルを救うという主の思いを私たちに伝えてくれると同時に、時代を超えて私たちをも救いに来られた救い主キリストを思い起こさせます。このように旧約の預言は救い主キリストを預言すると同時に現代の私たちについても語っているのです。すなわち死の墓に眠っている私たちを墓から引き上げ、約束の地、神の国に連れていかれる神の意志です。今日のこの箇所はまた、イエスがラザロを蘇らせたエピソードを思い起こさせます。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会へ手紙 8 章 8-11 節)

「肉の支配下にある者」つまり罪の内に生きるものは神に喜ばれないとパウロは語ります。そうではなくて神の霊は私たちの中に宿るようにとも勧めています。私たちはいずれ肉体の死を迎えますが、キリストの霊が私たちの心のうちにあるならば、キリストを復活させた方、つまりイエスキリストの父が私たちをも復活させてくださるとパウロは語ります。私たちの関心事は、肉体の死後どうなるかということですが、イエス・キリストが復活されたように私たちも復活するという希望がイエス・キリストによって私たちにも与えられているのです。

福音朗読 (ヨハネ 11 章 3-7、17、20-27、32-45 節)

今日の福音はラザロの蘇りが主題です。ラザロにはマルタとマリアという姉妹がいました。イエスと仲が良かった三人でした。そのラザロが病気になるイエスに早く来てくれるように人をやってイエスを呼びますが、イエスはなかなか動こうとはせず「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである」と答えられるのです。ラザロの死がそこで終わるものではなく、神によってふたたび命が与えられることを皆に知らせようとなさったようでした。それにしても、ラザロの死に直面されたイエスの悲しみは「心に憤りを覚えられる」ほど激しいものでした。神殿の境内で商売をしていた人たちを縄の鞭で追い払った時、「父の家を泥棒の巣窟」にしてはならないと怒りを覚えられた時と同じようでした。激しい怒りは私たちが奪った死、つまり罪に対する怒り、そして激しい悲しみは罪によって神から離れてしまった私たちに対する悲しみであるのです。「ラザロ、出てきなさい」というイエスの叫びは、私たちに呼びかけられています。私たちが陥っている罪の墓から出てくるようにとイエスは私たちに大声で呼びかけておられるのです。



子どものいばしょ「オラトリオ足立」(2023.)

P.S.

今週で 2022 年度が終わります。そしてまた新しい年度が始まります。同じように私たちもこの四旬節を過ごすことによって過去と決別し、新たな決心で前進しましょう。新たな生活新たな仕事を始められる人がいます。温かく迎え支えていきましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光